

「避難弱者」あの日、福島原発間近の老人ホームで何が起きたのか？

福島県の震災関連死者（1656人）は、直接死者数（1607人）を超えた（2月19日 福島県）。福島第一原発のある大熊町の双葉病院で、避難患者が多数亡くなったことは新聞やテレビでも取り上げられた。入院患者が住民避難の後回しにされ取り残された上、避難先も見つからないまま10時間200kmのバス移動の末、被災から20日間で高齢者中心に40人も亡くなったのだ。震災関連死は高齢者に集中している。著者は、高齢者施設の震災後の様子をできるかぎり多くの人から聞き取り、その中から、再度起こりうる大災害から命を守る教訓を得る為にこの本を書いた。



<避難から置き去りにされた特養ホーム…想像を絶する現場>

地震の大きな揺れの中、原発事故が起こっても寝たきりのお年寄りや栄養管から食事する人、透析や酸素ボンベが必要な人など、介護度の高いお年寄りをホームから出すことは非常に難しい。ライフラインがある程度確保されていた施設や、自家発電がある施設は、屋内待避で過ごすとしたところも多い。国から「避難命令」が出されて、「命令では仕方ない」と避難することになったが、100人を超える利用者を安全に移送する介護用車両は用意されず、やっと来た警察車両や大型バスでの移動である。寝たきりの方は入口の狭いバスには乗せられない。狭い場所で、皮膚の弱い高齢者はすぐに床ずれができ褥瘡になる。2日後、数日後、もっと生きられるはずだった人が亡くなっていった。

介護の必要な高齢者をまとめた人数で避難させられる場所は限られており、長時間のバス移動の末、工場やイベント施設に運ばれた。タライ回しのように何回も避難場所を変えられた施設もある。職員自らも被災者であり、若い女性の多い職場で放射能の不安もある。日を迫るにつれ、悩みながらも仕事を離れる職員が増えた。残った職員は、劣悪な環境下で、極限の過重労働を強いられた。身体能力の低い高齢者は、救援物資のおにぎりやパンなどの食料や水さえそのままでは飲み込むことができない。おかゆやパン粥にして食べさせる必要があり、寝たきりの人はベッドがないため抱えて上体を起こして食べさせる。オムツ交換をはじめ環境の激変に不安定になる高齢者に寄り添って、職員は夜も寝られない。目の前にいる高齢者を置き去りにできないという使命感だけで働いていた。紙オムツも暖房も介護用品も足りない。表情のなくなった職員、充満する汚物の匂い、この惨状が伝えられ、県内外の養護老人ホームから受け入れの声があがり、その後各地に分散して介護を受けている。

<地域防災計画に避難弱者対策を行政の責任で記せ>

時間と労力をかけてこの本にまとめ上げられた事実を、防災計画に生かさなければならぬ。本の最後には、高齢者福祉施設避難における地方自治体の役割や今からできることが整理されている。2013年3月の地域防災計画では全国どこの計画も、医療機関や高齢者施設などの各施設に具体的な避難方法が丸投げされている。しかし、府県をまたぐ受け入れ先の確保や安全な移動手段、介護人材や物資の手配などを個々の施設がバラバラにするのではなく、行政が当事者の意見を聴いて調整するべきことが書かれている。避難弱者を考慮した防災計画なしに再稼動するのは、福島の経験を無にすることに他ならない。この本が広く読まれ、防災計画策定に携わる人たちが避難の現実を共有できることを願う。（しず）